

## 文学館研究の転換期

# —全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化—\*

岡野裕行\*\*

文学館研究は図書館学や博物館学に比べると発展が遅れている学問分野であるが、それでも近年においてはその数が少しずつ増加している傾向にある。その時期は一般に、全国文学館協議会が発足した1995年以降であると考えられている。この点を確認するために、国立国会図書館の「雑誌記事索引」による文献調査を行ってみたところ、1995年以前と1996年以後との間で文献数やその内容面に関する相違点を見出すことができた。また、同時期には文学館に関する図書についても同様の変化が見られた。すなわち文学館研究は、ここ10年ほどの間に発展していったものと推測される。

### 目次

1. はじめに
  2. 文学館研究の状況と全国文学館協議会
    - 2.1 文学館数の増加
    - 2.2 文学館研究の状況
    - 2.3 全国文学館協議会の発足
  3. 文学館に関する文献数
    - 3.1 文学館に関する雑誌記事数
    - 3.2 文学館に関する図書の出版点数
  4. 考察
    - 4.1 文学館に関する雑誌記事数の変化
    - 4.2 全国文学館協議会の発足以前の状況
    - 4.3 全国文学館協議会の発足以後の状況
    - 4.4 文学館研究の成立事情
  5. 今後の課題
  6. おわりに
- 注・引用文献

### 1. はじめに

大阪府知事・橋下徹は府の財政窮乏の打開策の

一環として、2008年3月20日に大阪府立国際児童文学館を視察した上で、“通常の図書館となぜ分離しているのかわからない”<sup>1)</sup>、“府立図書館と統合しても問題点はないのではないか”<sup>2)</sup>と述べ、大阪府立中之島図書館などとの統合を検討する意見を表明した。このような行政側の意見から透けて見える思想は、「文学館も図書館も大して変わらない」というような両館の機能の違いを無視した単純かつ一方的なものであり、それはまた、目の前のコスト削減のみを追求した安易な政策と批判されるものだろう<sup>3)4)</sup>。しかしながら橋下の質問に対する同館館長・向川幹雄のコメントは、“本を文化財として扱うという理念も図書館とは異なっている”<sup>5)</sup>と述べながら、その「理念」についての具体案を表明することができない不十分で苦し紛れのものであり、文学館と図書館の違いを明確に押し出すようなものではなかったのである<sup>6)</sup>。

この出来事は、「文学館は図書館とはどのように違うものなのか」と改めて問われると、内部関係者（しかも館長職にある者）であってもその差異を説得力のある言葉でもって端的に表現するのは難しいということを教えてくれるだろう。このことは「文学館とは何か」を言い表す適切な言葉

\* 2008年5月20日受付 2008年10月20日受理

\*\* おかの ひろゆき 相模女子大学非常勤講師

が未だに見つかっておらず、それが容易には見つからない類のものであることを推測させてくれる。

では向川を始めとする大阪府立国際児童文学館の関係者を擁護できるような、以上のような文学館そのものの理念や機能を追求した研究はこれまでどれほどあったのだろうか。本稿ではそのような疑問に対する回答を探ってみたい。

## 2. 文学館研究の状況と全国文学館協議会

### 2.1 文学館数の増加

さて、現在日本には文学館と呼ばれる施設が数多く存在しており、先に触れた大阪府立国際児童文学館はその事例の一つにすぎない。元・北海道立文学館館長である木原直彦の継続的な調査報告の最新稿によれば、その数は2006年の時点で全国に583館を数えることができるとされる<sup>7)8)</sup>。木原による調査は1990年の時点では175館ほどの数が確認されていた程度であり<sup>9)</sup>、単純に考えても16年間でその数は約3.3倍(≒583/175)に膨れ上がっていることになる。この増加数を多いと見るか少ないと見るかは意見が分かれるところだろうが、1995年には285館<sup>10)</sup>、1998年には392館<sup>11)</sup>、2000年には478館<sup>12)</sup>、2003年には539館<sup>13)</sup>、2005年には555館<sup>14)</sup>という調査結果を見る限り、少なくとも今日においては着実に世の中に普及している施設であると評価できる<sup>15)</sup>。

もちろん、そこに収録された文学館の定義や選択基準について、木原が“形態が多種多様であるため明確な基準はたてられず、きわめて恣意的である”<sup>16)</sup>と断りつつ、図書館内に設置された文庫や作家が暮らしていた生家・旧居などを含めていることを考えれば、単純に増加数を見るだけでその普及状況を判断するのは危険である。誤解を招かぬように配慮するならば、それらを別の性質を持つものとして捉えて分類を施し、個々の活動の実態を検証していくことが求められるだろう。

木原の調査を参考にすれば、つまり今日における文学館という用語は、次のような二重の意味を与えられていると考えることができるだろう。

①文学館や記念館のように、館名に「館」とい

う用語が固有名詞として含まれており、文学に関する資料の収集・保存・展示のための独立した建物を有する施設。(狭義の文学館)

②館名に「館」という用語が固有名詞として含まれている独立した建物に加え、図書館内の文庫や展示室のように独立した建物を有していない小規模のものや、生家や旧居などのように作家が実際に暮らしていた住居の保存を目的とした施設などの総称。(広義の文学館)

木原の調査はこのうちの②の方針を選んでその全てを文学館として捉えており、全ての施設を同列に記述しているがために大雑把な一覧表になっている。それでも文学館の意味する範囲を②のように広く解釈しておけば、たとえ文庫・展示室・生家・旧居などの名称が付与されていても、それらも文学館の一形態と見なすことはできるため、木原の恣意的な選択基準やその成果としての一覧表が間違っただけということではない<sup>17)</sup>。

もちろんそのためには、文学館の定義を明確にしておく必要があるだろう。これについては既に筆者が2006年に試みており、“文学館とは文学に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養・調査研究・レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のことである”<sup>18)</sup>と定義している。本稿ではこれをさらに敷衍し、図1のように細分化と再定義を試みており、前述した①を独立系文学館、②を単に文学館と呼び、②に含まれる形態としてその他に依存系文学館・転用系文学館という概念を提示することで、その違いを明確化していくことにする。

### 2.2 文学館研究の状況

1995年に文学館という施設そのものを研究対象とする全国文学館協議会<sup>19)</sup>という団体が発足した。その2001年の会合において、同協議会の会長である中村稔は「博物館的機能」「図書館的機能」という二つの用語を用いることで、文学館が博物館としての側面を持ちながらも、同時に図書館(特に日本近代文学研究者に対する専門図書館)としての機能も有するという点で、両者の性質を

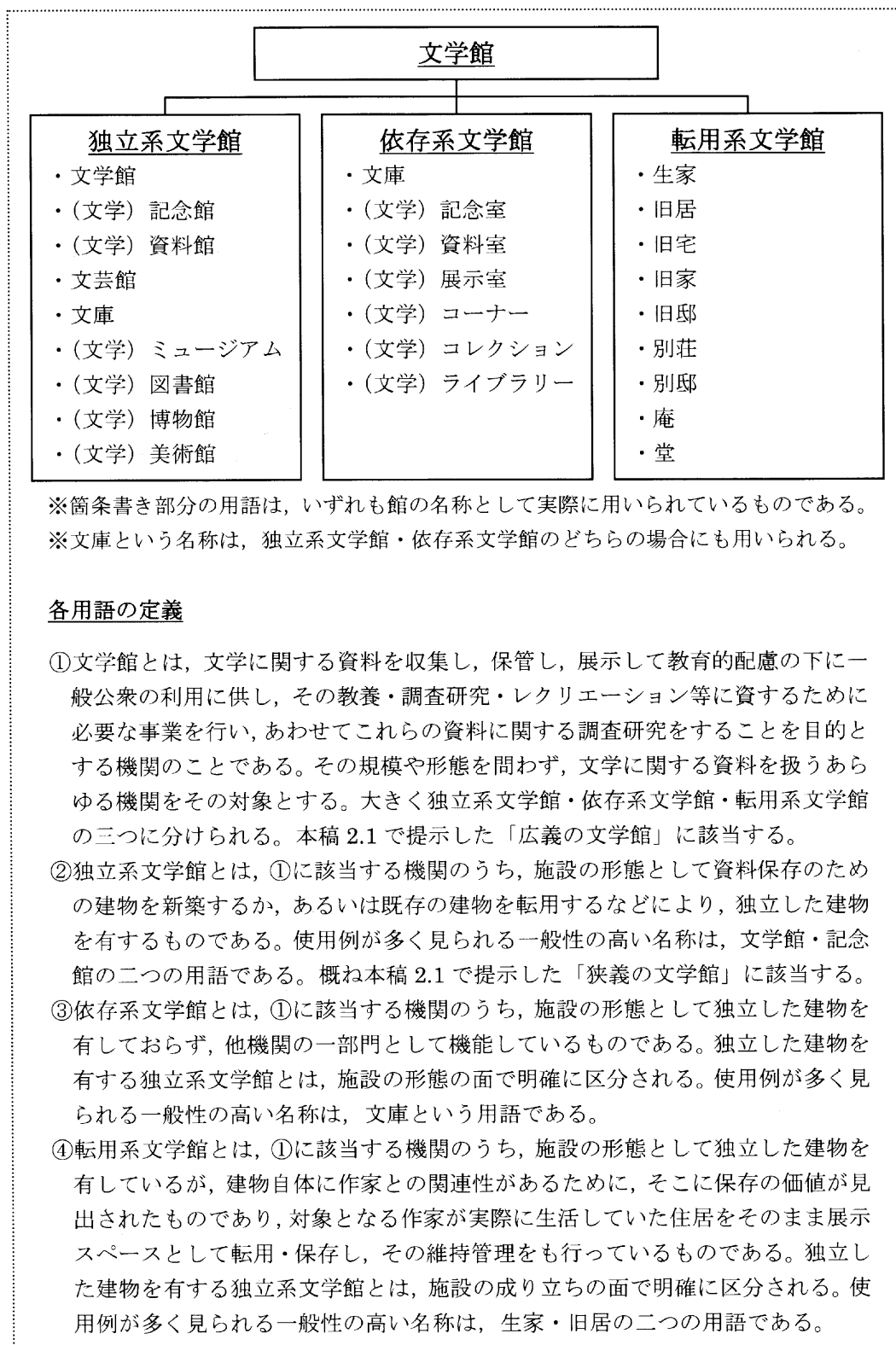


図1 文学館の種類とその定義

併せ持つ独特の位置付けにあるものと評価している<sup>20) 21) 22)</sup>。さらに近年ではそれら二つの機能に加え、文書館としての機能面も考えられると鳥羽耕史が指摘しているが<sup>23)</sup>、文学館について調査研究

を行っていくためには、今日では少なくとも図書館学・博物館学の両面からのアプローチが必須のものと考えられている<sup>24) 25) 26)</sup>。

このような全国文学館協議会が目指しているも

のは、会長の中村が既存の図書館学や博物館学の呼称に倣いつつ「文学館学」という造語を用いて問題提起しているように<sup>27)</sup>、図書館学や博物館学とは一線を画す別の学問体系を構築することである。別の学問体系とはすなわち、「図書館的」「博物館的」のように、既にその存在が広く一般に認識された機関名を借りずにその機能や役割を簡潔に表現できる言葉を模索し、文学館という用語のみで多くの人々がその存在を認識できるような社会状況を目指すことである。表1に示すように、同協議会の第1回会議の記録にはそのような「文学館学」の目指すべき方向性が記されており、それが文学館同士の共通目標となっていると考えられる<sup>28)29)30)</sup>。しかし文学館に関する調査・研究の発展は図書館学や博物館学と比べると遅々としたものであり、文学館を中心テーマに据えた研究の数は現状ではそれほど多くはない<sup>31)32)</sup>。

例えば『図書館情報学用語辞典』<sup>33)</sup>には、2007年末に刊行された第3版に至っても文学館という用語は見出し語として取り上げられていない。このことは図書館の類縁機関の一種と見なされる文学館の存在が、図書館情報学の世界でほぼ認識されてこなかったことを意味するだろう<sup>34)</sup>。同様に博物館の一形態として認識しようにも、その定義の記述に“広義には、美術館、動物園、植物園、水族館なども含む”<sup>35)</sup>とあるように、そこに文学館という用語が一切含まれていないことが見て取れるのだが、つまり文学館は博物館学の立場からもその存在が認識され難い状態にあるものと考えられる。先に触れた中村のように、文学館を専門図書館の一種と位置付ける意見は既に7年前に出されている<sup>36)37)</sup>。しかしそのような文学館関係者の取り組みに対し、これまで図書館学・博物館学に携わる研究者はどれほどの反応を示してきただろうか。現状としては、それに呼応した動きを見せていないというのが正直なところである。その存在自体が認識されていない以上、これまで文学館研究が遅々として進まなかったのはそのような状況を鑑みれば当然のことなのかもしれない。

### 2.3 全国文学館協議会の発足

さて、中村はこのような文学館研究の状況について、2005年に次のように述べている<sup>38)</sup>。

文学館は、全国的にみると、数え方によれば数百にも達するが、その中の主要な約八十館が集って、全国文学館協議会を組織して以来、本年が十周年にあたる。

いったい文学館とはどういう事業をする施設なのか、私見によれば、全国文学館協議会が発足するまで、まともに考えられてきたことはなかった。

これまでの全国文学館協議会の活動状況について、筆者は既に博士論文の中でまとめているが<sup>39)</sup>、その概略について本稿でも簡単に示しておきたい。その主な活動は「総務情報」「資料情報」「展示情報」の三つの観点から定期的に会合を催し、各文学館の職員同士が意見交換する形で文学館一般の意義や理念を模索するものである。その研究成果として『全国文学館協議会会報』という会報誌が1996年から継続的に発行されており、これは現在までに38号を数えるまでに蓄積されている<sup>40)</sup>。また、2008年3月には『全国文学館協議会 紀要』という小冊子も創刊するなど、その活動はますます活発化している状況にある<sup>41)</sup>。

中村の言に従うならば、日本における文学館に関する調査・研究は、同協議会が設立されて以降、今日までの10年ほどの間に活発化していったということになるだろう。つまりこのような中村の私見を正しいものとするならば、全国文学館協議会の発足は文学館研究の発展史を考えていく上で非常に重要な出来事であると見なされることになり、日本における文学館研究は1995年頃を境目として大きく二分されるものと予想される。とすると日本における文学館研究がどのように発展してきたかを考えていくためには、全国文学館協議会が誕生した1995年という時代の前後において、文学館研究の数やその質がどのように変化していったのかについて明らかにしていく必要があるだろう。すなわち、中村の私見を一般化するためには具体的な文献調査を行い、その事実を元に検証していくという手続きを踏まえることが求められる。本稿では全国文学館協議会の発足以前の時代を含め、今日に至るまでの文学館研究に関する文献調査を行うことで、その歴史的な転換期を探ってみることにしたい。

表1 全国文学館協議会の目指す文学館の理念など

総務（施設・設備・人事等）に関連して検討すべき事項	
1. 文学館の理念	<p>文学館はどういう存在であるべきかという理念についてのガイドラインをつくることはどうか、そのために協議会はどんな寄与ができるか。現在、文学館ないし文学者の記念館に期待されている役割としては以下のようなことがあるものと思われる。</p> <p>①遺稿、遺品等の蒐集・保存。</p> <p>②そうした遺稿、遺品等を研究者等に提供すること。</p> <p>③そうした遺稿、遺品などの展示や催し物を主催したり共催したり後援したりすることによる啓蒙的活動。</p> <p>④特定の文学者の記念館の場合、その文学者の研究の中核的機能を果たすこと（研究書の蒐集、保存、研究紀要や年鑑の発行など）。</p> <p>⑤観光の拠点となること、より多くの来館者に来て頂き、より多くの方々に文学の魅力に触れて頂くことも、文学館の重要な役割である。</p> <p>⑥地方の文学館の場合、地方文化の発信基地としての役割。地方同人誌の活動の援助から生涯学習の場まで。</p>
2. 学芸員（文学館の専門職員）について	<p>文学館には美術館等の学芸員と同様の専門的職員が必要であり、しかも、現在の学芸員資格に必要とされるものとは違った、文学者についての専門的知識と文学館特有の問題を処理する能力を備えた職員が必要であるが、そのためには、</p> <p>①そういう専門家が必要であることを経営主体（地方自治体等）にどうしたら理解してもらえるか。</p> <p>②そういう専門家をどうしたら養成できるか。</p> <p>③現在の職員の相互間で研修・協議の場を設けることはできないか。</p> <p>④専門家としての最低限の知識を提供するようなテキストを作成することはできないか。</p>
3. 施設・設備について	<p>①文学館が最低限もつべき空調設備などの施設・設備の必要条件や立地条件、設計に関する注意事項をとりまとめたマニュアルをつくることはどうか。</p> <p>②コンピュータ・ネットワークをつくるための問題。</p> <p>③映像化にどう対応していくか。たとえば AV 記録をどのように製作し、保存し、公開していくか、そうした活動に協力しあえるか。</p>

※出典は以下の文献による。

全国文学館協議会「III. 総務（施設・設備・人事等）に関連して検討すべき事項」  
『全国文学館協議会会報』No. 1, 1996, p. 90-91.

### 3. 文学館に関する文献数

#### 3.1 文学館に関する雑誌記事数

さて、文学館研究の発展を推し量るためのひとつの方法は、雑誌記事数を数量的に捉えていく計

量書誌学の考え方をを用いることであり、具体的に文学館に関する雑誌記事数の増減を数字で示してみることであろう。そこで本稿では国立国会図書館の提供するデータベース「雑誌記事索引」<sup>42)</sup>を利用し、そこに収録されている文学館に関する雑

